ラッパ屋第37回公演

凄い金魚

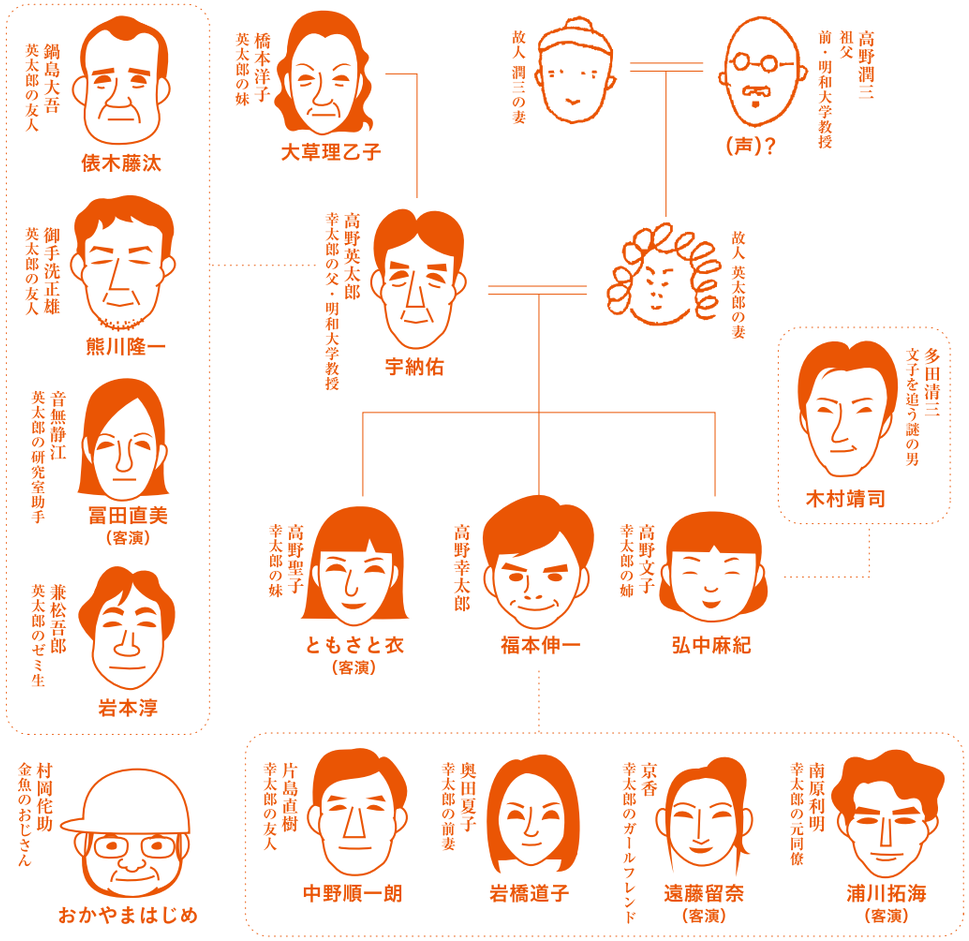
キャスト

福本伸一
おかやまはじめ
中野順一朗
岩橋道子
ともさと衣（客演）
遠藤留奈（客演）
宇納佑
俵木藤汰
大草理乙子
熊川隆一
岩本淳
冨田直美（客演）
浦川拓海（客演）
弘中麻紀
木村靖司

スタッフ

脚本・演出　鈴木聡
舞台美術　秋山光洋
照明　佐藤公穂
音響　島猛　ステージオフィス
衣裳　花谷律子
演出助手　則岡正昭
舞台監督　村岡晋

高野家家系図



中央線で金魚

「凄い金魚」は1996年に初演されました。僕がまだ30代だった頃の作品です。その頃考えていたのは「次の足場探し」のようなことでした。若さだけを売り物にできなくなってきた僕とラッパ屋にとって、ぴったりくる新しい芝居の在り方を探していたのです。辿りついたのは中央線沿線と思しき日本家屋の舞台、家族や親戚が集まる通夜の晩、リアルな日常と不意に訪れるへんてこりんなドラマ…。結果、芝居は好評を博し、現在のラッパ屋の「原点」のような作品になりました。

この特別思い入れのある作品を、客演の皆さんを迎えた新しいキャスティングと現在の僕らにぴったりくる新演出でお届けしようと思います。劇場はまさに中央線沿線の「座・高円寺」。僕らにとって初めての空間であり、新しいお客さんとの出会いも楽しみです。

「中央線の呪い」という実に楽しい本があり、それによると頑固で口うるさくあまのじゃくが多い中央線沿線に一度住むと（それすなわち、多少変わり者でもゆるーい気分で暮らしていける、ということですが）、二度と抜け出せなくなるそうです。実感があります。僕、西荻窪、荻窪、阿佐ヶ谷にしか住んだことがない…。「凄い金魚」もそんな芝居にしたいと思います。中央線な気分にたっぷり浸りに来てください。高円寺は飲み屋がたくさんあって楽しいし。（鈴木聡）

初演・劇評

▼（前略）社会でそこそこ責任を負って働き、それなりの充実感を持ちつつも、冒険心の燃え残りを握りしめている。そんな「若いおとな」の心の鍵盤（けんばん）を「凄い金魚」はポンとたたく。
―朝日新聞劇評より・山口宏子
1996年4月22日

▼（前略）人生は退屈かもしれないが、ありのままを受け入れ、楽しむ。この愚かしくも純粋で愛すべき人々の言動に導かれるようにして、一家のわだかまりが氷解する瞬間は感動的ですらある。そのきっかけとなる池にすむ「凄い金魚」とは何か。正体は劇場で確かめて欲しい。
―読売新聞劇評より・杉山弘
1996年5月2日

◆ラッパ屋プロフィール

1983年、広告会社のコピーライターだった鈴木聡を主宰者として結成された劇団。「大人が楽しめる芝居づくり」を標榜し、小劇場には珍しく30～40代以上の男性客も多数。「おまぬけなコメディだがキュンときてズンとくる」と評判。演劇ビギナー、演劇マニア、OL、主婦、業界人、小市民など幅広い層より支持されている。今作『凄い金魚』は、1996年のシアタートップスでの初演、1997年シアターVアカサカでの再演に続き3度目の上演となる。

◆ラッパ屋主宰・鈴木聡（すずきさとし）プロフィール

1959年東京都生まれ。早稲田大学卒業後、コピーライター・クリエイティブディレクターとして活躍。サントリー「ワンフィンガーツーフィンガー」、ホンダ「インテグラ、ノッテグラ」「こどもといっしょにどこいこう?」、キリンー番搾りほか代表作多数。1983年、サラリーマン新劇喇叭屋（現ラッパ屋）を結成。現在は演劇、テレビドラマ、映画から新作落語まで幅広く執筆。NHK連続テレビ小説『あすか』（'99年放送）、『瞳』（'08年放送）の脚本も手がける。ラッパ屋『あしたのニュース』、グループる・ばる『八百屋のお告げ』で第41回紀伊國屋演劇賞個人賞受賞。今年は、2月に新橋演舞場での『ペテン・ザ・ペテン』、北九州芸術劇場プロデュース『BEN』、5月に青年座『をんな善哉』と執筆作の上演が続く。

お手伝いさん募集！

ラッパ屋では、制作のお手伝いをして下さる方を募集しております！ご興味のある方は、是非ご連絡下さい！
ご連絡先　ラッパ屋　TEL&FAX 03-5397-0283　E-mail rappaya@jcom.home.ne.jp